

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2023 年度 参加者レポート

天野直子 Carleton College, Northfield, MN

中間レポート

配属先の Carleton College は、ミネソタ州 Northfield にある Liberal arts で知られる私立大学です。Northfield は、ミネソタ最大の都市ミネアポリスから 1 時間ほど南にある小さな町で、St. Olaf College という私立大学もあり、College town として小さいながらもコミュニティの活動が維持されている町です。ミネソタ州はアメリカ北中部にあり、冬の寒さが有名ですが、この冬は異例の暖かさだということで、降った雪もすぐに溶けてしまい、春先のような暖かさのなか、リスが元気にキャンパスを駆け巡っています。

応募～派遣まで

小学校教員として勤める傍ら、日本語教師の民間資格を取ったり、過去に携わった国際貢献ボランティアの経験の伝え方などを学んだりしていました。派遣前の数年間は、主に英語を教える仕事にチャレンジしました。子どもたちが英語で話すことを楽しいと思える授業を目指して日々試行錯誤をしていましたが、自分の英語力のなさを痛感するにつれ、もっと英語を学びたいと考えるようになりました。何か私にも挑戦できることはないかと探そううちに、FLTA のプログラムを目にしました。しかし、当時の私の英語力では応募にも至らなかったもので、1 年間応募資格を得るまでコツコツと学習を積み重ねました。資格を満たしたことが分かり、ひとまず応募だけでもしてみよう、と決意したのが 2023 年の夏でした。

内定の連絡を頂いてからも、本当に私で良いのだろうか、何かの間違いではないだろうか、と、半信半疑で日々の仕事をこなしながら、派遣に必要な書類を揃えていきました。苦労したのは、英文健康診断書と渡米に必要なワクチン接種で、必要な様式も、必須のワクチンも大学によって異なること、渡米直前に必要な書類がさらに追加されるなど、色々肝を冷やしたことが思い出されます。

派遣前の 6 月に東京でフルブライトの他のプログラムで派遣される皆さんと合同の説明会に参加して、初めて他の FLTA の方ともお会いできました。アメリカ大使公邸でのレセプションは、コロナ後久しぶりの開催になったとかで、前年度の Alumni の方ともお会いできて、とても良い思い出になりました。8 月の渡米前に 2 週間ほどオンラインでの研修がありま

した。各国の Language Associate (LA) と共に日本語の指導の一部を練り上げることになりましたが、研修中にもメンバーがどんどん渡米して行き、なかなかみんなで時間を合わせて考えるのが難しかったことも今は懐かしく思い出されます。この時も、もっと英語を学ばなければいけない、と痛感したのですが、渡米してからはさらにこの思いが深くなっていました。

LA としての仕事

日本語 LA の主な仕事は次の 4 つが挙げられます。

- ① 小テストの採点
- ② 文化的イベントの開催（お茶の時間、ランチテーブル、映画の時間各週 1 回）
- ③ 会話練習及びオフィスアワー（週 2 回）
- ④ 週 2 時間の代講
- ⑤ 学生への週報メール送付、SNS などの宣伝活動

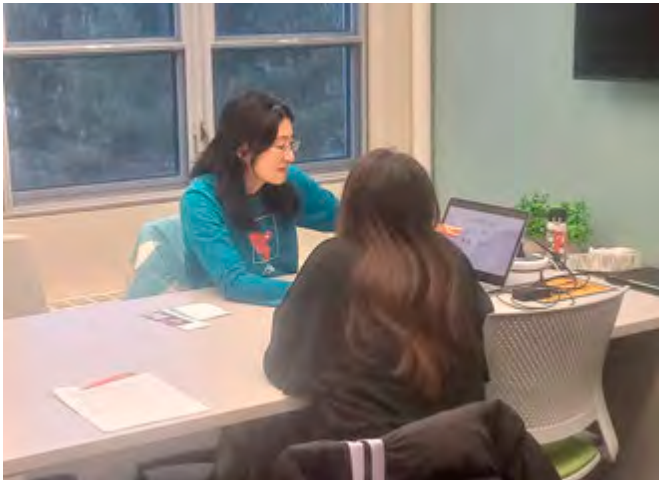
④の代講は秋学期の半ばから始まりました。それまでは学生と一緒に授業に参加して、教え方を学びました。また、各単元の初めに文法指導の時間があり、その時間は学生と同様に授業に参加して各単元の要点を確認しました。



お茶の時間



ランチテーブル



オフィスアワー

1日の過ごし方

ここでは、一番忙しい代講のある金曜日の過ごし方を例にとりながら紹介します。

学科の教授が朝1コマ目の代講の授業を観察して、午後の4コマ目のクラスまでの時間にご指導をして下さいます。頂いたご指導を可能な範囲で反映させた上で、午後の授業に備え



授業の1コマ

ますが、冬学期は履修しているクラスが2コマ目にあり、合間に小テストの採点、成績の記録、昼ご飯を済ませるとあっという間に午後になります。午後のクラスが終わると再び小テストの採点、成績の記録があります。3時過ぎから5時までが貴重な自分の時間ですが、履修している講義の勉強をすることが多いです。時々図書館にあるWriting Centerに週報やSNSの記事を見てもらいに駆け込む時もありました。5時からでは会話練習を行います。会話練習は木曜日と金曜日の週2回、初級、中級の学生が週替わりに来られることになっています。中級は教授のテーマに沿って20分、初級はそれぞれの単元で必要だと考えたものを私が組み立てて、教授に承認して頂いた内容で実施していました。

6時に会話練習が終わったらすぐに別教室に移動して、今度は映画の時間の準備をします。図書館にはたくさんの日本映画が揃っており、近くの大学の図書館からも融通して借りることができるので、その中から興味を引きそうな作品を選ぶことが多かったです。後述する映画の授業と同様に事前に2時間余りをかけて見ること、また見た後には週報メールに概略を記載して学生への興味づけを図ることなど、関連する準備がとても多い仕事の1つでした。しかし、学生はそれぞれの活動や学習で忙しく、なかなか人が集まらず寂しい回もありました。映画の時間の前に夕食を済ませたり、テイクアウトしたりして映画の時間に備えます。映画が終わり寮に戻ると夜はもうとっぴりと暮れて9時半ごろになります。今週もよく頑張った、何とか乗り切った、と思う瞬間です。

履修している授業

Carleton Collegeはアメリカでは珍しいと言われる3学期制の大学です。そのため、1学期に1科目授業を履修することになっています。そのうち1科目はAmerican Studiesの要件を満たす必要があります。

秋学期に履修したのはその要件を満たすIntroduction to Cinema and Studiesという1回1時間半、週に2度受ける授業でした。アメリカの授業スタイルは日本よりもinteractiveだと聞いていましたが、授業は表情豊かに映画で使われる技法とその効果について講義される教授、また時おり投げかけられる質問の波に即座に自分の考えを組み立てて反応する学生に圧倒されました。講義だけでなく見た映画について、それぞれ自分の分析を小グループで伝え合う時間もほぼ毎時間ありました。アメリカの名作映画だけでなく、中国やフランス、アルゼンチンなどの動く美術作品を見ているかのような映画も初めて知り、映画の奥深さを楽しみました。しかし、毎回映画を見ていくこと、教科書を読んでいくことに加えて、英語でのレポート執筆ではこれまで使ってきた英語が大学の講義で使われる英語には全く太刀打ちできないことを実感し、本当に苦労しました。そのため大学のWriting Centerで働く

学生には、正しい英語表現や考えを分かりやすく伝える文の流れなどを沢山確認してもらいました。

冬学期は Art History の学科から、Japanese Art and Culture という 1 回 1 時間、週 3 度の科目を履修しています。日本の美術作品がどのような切り口で評価されるのか、というのを教授や、履修している学生から毎回聞くことができ、本当に興味深い授業です。その作品が生み出された歴史的背景を知ること、さらに作品を鑑賞する引き出しが増えたように感じます。ここでも作品を分析する語彙不足に悩まされますが、元々日本に限らず美術は好きなので、気づいたことを話さずにはいられない衝動にかられ、少しずつですが挙手をして自分の考えを伝えられるようになっていくことは、自分の中では大きな変化です。



大学のチャペル

生活について

Carleton College には同じフルブライトのプログラムで中国語、アラビア語、フルブライトとは別のプログラムでロシア語、フランス語、ドイツ語の LA が派遣されています。それぞれ出身もちろん異なりますが、それぞれの文化や持ち味を生かして日々切磋琢磨しています。秋学期で帰国することになってしまったスペインの LA からも大きな影響を受けました。

大学から LA 用に個別に部屋を用意していただき、シャワーや台所を共有しながら生活しています。他の学生とは少しスペースを分けていただいたことで、日々の生活の中でモードを切り替える余裕があることはありがたいことだと思いました。共有スペースも頂いてはいるのですが、それぞれの仕事の兼ね合いから LA の皆と一堂に会することはなかなか難しいです。それでも影に日向に支えてくれるかけがえのない仲間です。

あっという間の 9 ヶ月間でした。英語力、指導者としてのスキル、コミュニケーション能力など、さまざまな点で未熟な自分と向き合いつつ、その時の自分ができることの精一杯を出し切った、そんな濃密な時間を過ごした 9 ヶ月でもありました。

LA (Learning Associate) としての仕事

秋・冬学期に引き続き、毎週 1 回、お茶の時間や映画の時間などの文化イベントを企画・運営する役割を担当しました。特に、ランチテーブルでは、大学のダイニングで学生や先生方と一緒に食事をしながら、日本の文化について話し合い、日本語での会話を楽しむ時間を提供しました。また、お茶の時間では、前年に参加した学生たちの要望を取り入れて、いちご大福や味噌汁の作り方を教えるだけでなく、赤飯や押し寿司といった手の込んだ料理も効率よく準備できるようになりました。さらに、大学主催の「International Festival」では、学生主体の Japanese Circle と協力し、抹茶と和菓子を提供するブースを出展しました。このイベントは大盛況で、思わず抹茶を点てる機械が欲しいと感じるほどの盛況ぶりでした。豆を箸で移動させるゲームや折り紙のコーナーも準備し、参加者に楽しんでもらえるよう工夫しました。映画の時間には、学生が作成した映画リストを基に内容を吟味し、学生の興味に合った作品を選ぶことができました。



日本語指導では、中級 2 クラスの代講や、単語・漢字の小テストの採点、週 2 回のオフィスアワーを担当しました。中級クラスの最終発表として行われる作文の添削方法も、スーパーバイザーの先生から学び、学生が自ら考え、推敲する助けをしました。オフィスアワーでは、口頭試験や作文発表に向けた練習の相手をしたり、学生が書きたいことを誤解なく伝えるための表現を一緒に考えたりしました。特に、これまで学んだ文法や語彙の範囲内で学生が表現を工夫する過程は難しかったものの、大変勉強になりました。週 1 回の授業の代講では、初級から中級への進度に合わせ、新しい内容を教えるために準備に多くの時間を費やしました。学生の既習知識を活用しつつ、新しい文型や語彙を用いて自分の考えを表現できるように指導することは難しかったですが、スーパーバイザーの先生からのアドバイスを受けながら、授業を形にするまで頑張ることができました。最後まで根気強く指導してくださった先生方に感謝しています。

最後のオフィスアワーの日は、偶然スーパーバイザーの先生の流しそうめんのイベントと重なっていました。オフィスとして使用していた部屋の近くに日本語の学生がたくさんいたので、イベントへの参加を呼び掛けていたところ、突然声を掛けられました。何か質問があるのかと思っていたら、忙しい時間をやりくりしながら有志で準備した寄せ書きをプレゼントしてくれました。これまで学んだ日本語を駆使して感謝の気持ちと励ましの言葉を伝えてくれました。語学アシスタントとしてのこの 9 ヶ月でも少しは役に立てたのかも、と思える瞬間で、心の底から嬉しかったです。この経験は、私にとって LA としての活動は単なる仕事ではなく、学生との貴重な交流の場であることを改めて認識させてくれました。



履修したクラス

春学期には、スペイン語のクラスを履修しました。このクラスは日本語の授業と同じく、週 5 日毎日 1 コマの授業があり、平均 2 単元に 1 度の単元テストや会話試験、日記のテストな

どが行われ、話す・聞く・書く・読むの 4 技能が総合的に問われる内容でした。大学のオリジナルテキストは、紙ベースとデジタルで提供され、デジタル教材には自己学習ができる課題が豊富に含まれていました。スペイン語を学ぶ中で、これまで訪れたスペイン語圏の国々の歴史や様々な問題についても知ることができ、大変興味深い内容でした。しかし、20 課あるテキストの 15 課から学び始めたため、初めは先生の話を理解することや、話す・聞く能力の高い周囲の学生に追いつくのが大変でした。Spanish Help Desk などの語学学習支援制度を活用して、スペイン語が母語の学生や得意な学生に日記を添削してもらったり、会話の練習をしたりすることで、少しずつレベルアップすることができました。

LA としての仕事を優先しつつ、毎日数時間余りの学習時間を確保することは大きな挑戦でした。特に、会話試験に向けてグループの学生と練習時間を調整したり、指導教授のオフィスアワーに訪問して授業で残った疑問を解決したりすることは、忙しい中でも貴重な経験となりました。スペイン語の履修を通じて、学生として語学を学ぶ忙しさを実感し、言語の違いはあるものの、語学を教える際に大切なポイントを学ぶことができました。また、日本語を学ぶ学生への理解も深まり、意欲的に学ぶ周囲の学生から刺激を受け、最後まで学び続けることができたことは大きな自信になりました。

生活について

毎週のように新しい挑戦が締め切りと共にやってくる目まぐるしい生活の中で、1 月から週 1 回、地域の弓道サークルに参加することで気分転換を図ることができました。弓道は初めての経験でしたが、指導者の先生のお手本を見ながら実践し、学んだことを言語化していく過程で多くの気づきを得ました。先生の人柄に触れたり、サークルの仲間から上達のための助言を受けたりすることで、新たな教え方を学び、弓道の奥深さを体験できたことは貴重な経験でした。また、フルブライト・プログラムから案内されたイベントの一つが、州都セントポールで開催されることを知り、思い切って参加することにしました。



そこで、Alumnusの方と知り合い、地方都市に住んでいたため、人脈を広げることの大切さを実感しました。Alumnusの方との会話の中で、身近な社会やまだ知らない世界を知る楽しさを知り、今後の活動へのモチベーションも高まりました。このような機会を提供してくださったIIEの方々にも感謝しています。



終わりに

この9ヶ月の活動を通じて、学ぶことの難しさや楽しさ、コミュニケーションの大切さ、文化交流の意義を改めて感じました。現在、このプログラムを通して学んだことをどのように生かすかを考えているところです。ここで得た経験と知識を活かし、より多くの人々が日本文化を楽しみながら学べるような活動に取り組んだり、社会に貢献したりする形で生かしていきたいと思っています。

このような目標を実現するためには、語学力はもちろんのこと、異文化理解能力やコミュニケーション能力をさらに高めていく必要があります。そのため、今後も積極的に学習を続け、様々な人と交流することで、自分の成長につなげていきたいと考えています。

始める前には自分1人では難しいかもしれないと感じていたことも、周囲の方々の助けを借りながらやり遂げることができました。このプログラムへの挑戦を応援し、送り出してくれた日本の友人たちが、折に触れて話を聞き、励ましてくれたおかげで、気持ちを切らさず挑戦し続けることができました。何よりも、9ヶ月という短い期間にも関わらず貴重な時間を割いて指導してくださった大学のスーパーバイザーの先生方、受け入れ態勢を整えてくださった大学、そしてIIEおよび日米教育委員会の皆様に心より感謝しています。本当にありがとうございました。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2023 年度 参加者レポート

福山かおり Mississippi Valley State University, Itta Bena, MS

中間レポート

今年度ミシシッピバレー州立大学に派遣されております。本大学はミシシッピ州のちょうど真ん中に位置するイッタベナという場所にあり、生徒数 2000 人以下の小規模校で、HBCU (Historically Black Colleges and Universities) というアフリカ系アメリカ人向けの大学の 1 つです。私は現職の県立高校教員で、自己啓発休暇制度を利用して FLTA プログラムに応募しました。

応募のきっかけ

海外留学は社会人になってからずっと心に抱いていた私の長年の夢でした。とはいえ高い留学費用を自力で賄う財力は私にはなく、そのため奨学金制度を利用し留学をすることを検討していました。

教員を対象とした FLTA プログラムの存在を知ったのは、働きながらインターネットで情報を探していた時です。学校によっては英語教員を対象に FLTA プログラムの案内が通知されることがあるようですが、私の学校ではそのようなことはなく、たまたま見つけた Fulbright 奨学金のウェブサイトでこのプログラムを目にしました。以前は応募時点での年齢制限があったようでしたが、現在は廃止されているようです。

最初にプログラム参加の打診をした当時、私はちょうど勤務する自治体における自己啓発休暇の利用が可能になる年だったため、勤務校の校長にプログラム参加の相談をしたところ、当時の学校の事情もあり、希望は断られてしまいました。その後ほどなくしてコロナウイルスが流行し、しばらくは海外渡航ができない時期が続きました。日々の業務に追われながら、しばらく時間が過ぎていきましたが、常に留学のことは頭の片隅にあり、自分なりの英語学習は続けていました。

大きな転機は、一昨年現在所属する高校に異動になったことです。赴任したのは、英語学習に意欲的な生徒たちばかりで、数名の海外からの帰国生徒も在籍している国際理解教育に特化した学校でした。また、担任するクラスの女子生徒 2 人がアメリカ留学をしたことは、私にとっては海外留学への熱意を復活させる大きなモチベーションになりました。その当時の私はキャリア的には中堅に差し掛かっており、以前の FLTA プログラム募集要件に照らしたら応募の年齢制限を過ぎている年

齢だったため、実際に行動を起こすまではものすごく迷いました。しかし、このチャンスを逃せば二度と海外に長期で行けるチャンスはないと思い、悩みに悩みぬいた末、プログラム応募に至りました。所属校の管理職にこの話を持ち掛けたところ、快く承諾してくださったことも、私の決断の大きな後押しとなりました。

応募書類について

募集要項がオープンになるのが、応募締め切りの 3 か月ほど前でした。応募書類がアップロードされると、まず全ページに目を通して、その膨大さに圧倒されました。あまりにも膨大すぎて、やっとすべての書類を書き終えたと思ったら、新たなページを発見するという始末でした。3 枚の推薦書を準備する必要があり、私は現任校の管理職の先生と、前任校の英語科主任の先生にお願いし、英語の履歴書やエッセイの添削、面接の練習には、ALT の先生にご協力いただきました。これらの先生方のご協力なくしてプログラムの合格は達成できなかったと思っており、心の底から感謝しています。

選考から内定、派遣先決定まで

応募書類の提出期限が 8 月末、面接の通知が 9 月上旬、オンライン面接が 9 月下旬に行われ、内定通知は 10 月下旬でした。面接から内定の連絡が来るまでしばらく時間がかかるので、その間は辛抱強く待つ必要があります。その後年明けの 3 月中旬に派遣先の大学のリストが通知され、4 月に派遣先が通知されます。派遣先の大学のリストが送られてくる際、希望順に並べ替えて返信するよう通知されましたが、その順番はあくまで希望であり、場合によっては希望通りにならない可能性があることをあらかじめ念頭に置いたほうがいいです。私たちは基本的には自分が所属する大学を選ばません。FLTA プログラムが学位取得型の奨学金と大きく異なる要素の 1 つに、このマッチングプロセスがあると思います。Fulbrighter として皆が平等に手厚い保障を得られることには変わりはありませんが、週当たりの勤務時間や、雇用環境、労働環境、生活環境などのすべてが大学ごとに大きく異なります。その点を考慮し、どのような状況に置かれてもそれに適応していくという事前の心の準備が必要です。

大学について

私が現在所属する大学は、1 クラス 20 人以下の少人数制をとっており、私が受け持つ日本語のクラスの登録者数は、14 人前後、実際に授業に定期的に出席するのがそのうちの 5 人程度です。出席率の悪さ、授業に遅れて参加してくる学生の多さは、全講座を通しての課題だそうで、当初はこのような状況に対する日本の高校とは全く違う大学の対応の仕方に戸惑いました。私は必要に応じて学生にメールで状況を問い合わせたり、欠席者を対象に補講を行ったりして対応しています。

大学には日本人の講師がほかにいないため、授業の計画は自分自身で自由に決めることができ、日本から持参した教科書をベースに、時には自作の教材を授業で使用したり、インターネット上の動画を見せながら議論を行ったりなどある程度柔軟性を持った授業のプランニングを行っています。

大学内はもちろん大学外の半径 100 キロ圏内に日本人が全くいない土地ですが、日本のものはあふれており、大学内を歩くと日本のアニメの T シャツやパーカーを着ている学生にすれ違い、スーパーに行けば日本食や日本の家電製品が多く扱われています。学生たちはみな、ほぼ日本のアニメについては熟知していて、日本の高校生にも勝るとも劣らないレベルであり、そのため日本に親近感を持っている若者は多くいます。た



日本語クラスの生徒と



同僚の FLTA と

だし、学校教育で日本語を学んだことのある学生はあまりおらず、少なくとも私が所属している大学では、日本語のクラスに登録していた学生はほとんどが初級レベルだったため、授業では英語を使ってひらがなを 1 から教える必要がありました。これにはアメリカの学校教育で学ばれている第 2 言語の大半がスペイン語だということに起因しているようです。ただしインターネット上の動画やスマートフォンのアプリ等で自主的に学習をしている子は多く、授業中に自分で学んだ言葉を発して日本語で会話を試みるなど、学習に対しては非常に意欲的です。

ワシントン DC における中間カンファレンス

11 月下旬、ワシントン DC にて世界 50 か国以上総勢約 350 人の FLTA が一堂に会するカンファレンスが行われました。このイベントは私にとってこのプログラム期間中最も印象的な出来事と言っても過言ではありません。実際に会場に足を運んだとき、その人の多さを目の当たりにして圧倒されました。5 日間のカンファレンス期間中、実に様々な国の人と交流をし、日本にいたら決して出会うことのなかっただろう国の人々と出会えたことは、私の人生における貴重な財産です。



ワシントン DC における中間カンファレンス

最終レポート

6 月上旬にアメリカから帰国して、日本の勤務校の業務に復帰してから 2 か月が経ちました。日々の業務に忙殺されつつも、折に触れ写真を見返しては、アメリカでの思い出に浸ることがあります。すべてが順風満帆だった 10 か月とは決して言えません。何度も苦しい思いをし、理不尽だともたくさんありました。日本での常識が一切通じない現実には愕然としたこともあります。しかし、せっかく与えられた一生に一度の機会を無駄にしたいという一心で、耐えに耐え抜いてプログラムを終えたからこそ、得られた収穫もたくさんあります。その記憶の一部を以下に記していきたいと思います。

生活環境について

私が所属していた大学は、イッタベナというミシシッピのちょうど中間に位置した地域で、かつては広大な土地を利用した

プランテーションが盛んに行われていた場所です。近隣の主要都市からは120km以上離れており、約10キロ離れた場所にスーパーや役所がある小さい町はあるものの、公共交通機関がほぼなく、日々の移動手段の確保にはとても苦労しました。基本的には友人や大学のスタッフに送迎を頼み、時にはレンタカーを借りて、遠くの街まで運転することもありました。自分の運転で好きな時間に好きな場所へ行き、新しい景色を見たり新しい人と出会ったりするたびに、心に羽が生えたような気がしたことを覚えています。運転には常に危険が伴いますが、ひたすら続くアメリカの原風景を眺めていると、アメリカがいかに豊かな自然に恵まれた壮大な国であるかを肌で感じることができました。日頃のストレスが運転によって解放されるような気がしたことを今でも鮮明に覚えています。

日常生活は、2kmの大学の構内で生活を送っており、住居は大学内の職員用アパートを借り、週末は学内のジムや図書館を利用したり、同僚の FLTA と集まって料理をふるまったりする生活を送っていました。インド、エジプト、ロシアの FLTA がいましたが、あまりにも多くの時間を彼らと過ごしたため、彼らの国の食文化にはかなり詳しくなりました。彼らと協力して誰かに車出しを頼んだり、有料の大学の送迎サービスを利用したりしながら、時には食糧が底をつく恐怖におびえつつ、日々を過ごすというのは人生で初めての経験でした。日々を大学の中のみで過ごしていると、自分の思考が行きづまって、無力感に襲われることもありました。アメリカの広大な土地にいるのに、自分の世界が半径 1km 以内で完結してしまうという感覚です。中間カンファレンスで各国の FLTA と話したところ、個々の事情はそれぞれ違えども多くの人が私と同じように日常に悩みを抱えているようでした。私の場合、日ごろのスト



レス要因の最たるものは移動の制限でした。そのため、少しでも休暇があれば、車に乗って外に出て、アメリカの文化や多様性を肌で感じることは私にとって必要な時間でした。日本に戻った現在、いかに日本が便利で、いかに自分が不自由のない環境にいるかを痛感する日々です。自分の身の回りの人たちが環境のありがたさをより一層実感できるようになったことは、この 10 か月間を通して得た大きな収穫のひとつと言えます。

後期の授業について

後期の授業では前期に引き続き初級者向けの日本語の授業を担当しました。前期に比べて学生数は減ったものの、意欲的な学生のみが履修していたため、遅刻欠席が少なくスムーズに授業を進行することができました。さらに後期には、大学内の教員養成講座において、ゲスト講師として日本文化についての紹介を行う機会がありました。自分の働く高校での様子を紹介したり、日本の学校に ALT を派遣する JET プログラムについて紹介したりしたところ、学生は皆熱心に聞きいってくれ、特に JET については、多くの学生から質問を受けました。

また、後期からは大学での授業に加えて、大学の付属幼稚園で週に2回の授業が加わりました。3歳から5歳程度の幼児に、ひらがなや数字、歌などを教える活動を通して、日本の文化に親しんでもらうことを目標に授業を行っていました。子どもたちはとても吸収が早く、一度聞いた歌や数字はすぐに覚えてしまい、私の名前もすぐ覚えてくれました。ただし、文字を識別することは年齢的に難しかったようで、ひらがなの文字と音を結びつけて覚えることは、最後まで不可能でした。週2回の授業を楽しみにしてくれる子どもたちが多く、私も子どもたちと会えるのをいつも楽しみにしていました。近隣のスーパーなどでたまたま会った幼児の一人が私の名前を呼んで元気に駆け寄ってくれ、その子のご家族と長時間話し込んだのもいい思い出です。「国」とか「世界」とかに対してまだ漠然とした理解しかない子どもたちに、私が日本人だということを理解させるのには苦労しましたが、彼らが成長したときに、私の日本語の授業を心の片隅で覚えてくれていて、それが少しでも日本に興味を持つきっかけになることがあれば、こんなにうれしいことはありません。

アメリカでの 10 か月間を振り返って

アメリカでの 10 か月間を振り返ってみると、本当にたくさんの出会いがありました。大学での同僚の FLTA をはじめ、日本語の学生たち、幼稚園の子どもたち、中間カンファレンスで出会った世界中の FLTA、地元のスーパーの店員さん、旅先での出会い。今年の夏には、アメリカで出会った友人の一人が私に会いに日本を訪れてくれました。日本にいたら決して出会

えなかったらこのような人たちとのつながりは、私の何よりも宝物です。彼らは、私の世界に対する見方に新しい視点を与えてくれました。

また、アメリカに長期滞在することで、アメリカという国について深く知ることができました。プログラム以前、私はアメリカを訪れたことがありませんでした。入国の際、Immigrationで今まで見たことのないほどの長蛇の列を目の当たりにし、アメリカが世界中から人が集まる自由の国であることを実感し、空港から大学に向かうまでの道すがら、どこまでも続くアメリカの原風景に感動して、大学に到着すると、南部なまりの強い英語に圧倒されました。大学ではアフリカ系アメリカ人の歴史について学び、アメリカに根強く残る差別や格差に彼らが苦しんでいることを知りました。また日本がアメリカにおいて経済的にも文化的にも大きな存在感を持っていることを知り、母国の良さを改めて実感することもできました。このようなアメリカで得たすべての知見を、今度は日本の生徒に伝えていきたいと思います。

さらに、アメリカでの体験は私の英語教育に対する見方に変化を与えてくれました。滞在中、実に様々な国の人の英語に触れましたが、各国独特の発音や文法の誤りによって時折聞き取りづらいつ感じることがもありました。しかし、現地の人は彼らの英語をきちんと聞き取り、問題なくコミュニケーションを行っていました。このことは、コミュニケーションにおいて最も重要なことは「伝わる」ということであり、文法や発音の正確さその手段の一つであるということを私に改めて気づかせ

てくれました。もちろん正しい文法や発音は、相手のスムーズな理解を促すために重要であることは言うまでもありません。

しかし、英語圏以外の英語話者の割合が増え、様々な国の人がその国独自の発音を用い、しばしば文法的誤りがある状態で発話している現実を考えると、世界共通語としての英語という意味では、英語の「正しさ」よりも英語が「伝わるかどうか」のほうに優先順位は高いのではないかという考えに至りました。このような気づきは、「正しい英語」を教えることに重きを置きがちな学校教育において、私の授業への意識に変化をもたらしました。より積極的に生徒の発話をしようとする姿勢を引き出すようになりましたし、私自身も間違えを恐れず英語で発話するようになりました。

最後に、プログラム参加にあたって協力してくれた日米教育委員会の皆様、IIEの皆様、応募に際してご協力いただいた当時の校長先生、教頭先生、ALTの先生、日本帰国時に「おかえり」と言って暖かく迎え入れてくれた先生方、生徒たち。そして私のプログラム参加に賛同しいつもサポートしてくれた両親には、感謝してもしきれません。応募以前、プログラム参加に悩みに悩みぬき、アメリカ滞在中も苦勞の連続でした。思わぬ事態に翻弄され、精神的に疲弊することもありました。支えてくれた人がいたからこそ最後までやり遂げることができたと思っています。今後は、アメリカで学んだことを、日本の教育現場に還元し、日本の英語教育の発展に少しでも貢献できればと思います。人生における宝物のような経験を与えていただき、本当にありがとうございます。



フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2023 年度 参加者レポート

間宮由玲子 George Mason University, Fairfax, VA

中間レポート

私のいるジョージメイソン大学は、ワシントン DC の近郊であるバージニア州フェアファックスという非常に治安の良く、緑豊かな街に位置しています。現地での秋学期の生活を終えて感じたことについて書かせていただきます。

フェアファックスでの生活

街について：

私が滞在しているフェアファックスには 1 万社近いテクノロジー企業が世界中から集まっていること、また、ワシントン DC に近い立地から、IT 関連企業または政府関連組織で働いている割合がとても高いことで有名です。そのため、世界中から人が常に流入しており、人種・文化・食などが多様性に溢れているのもこのエリアの特徴です。私が街や大学のキャンパスを歩いていると道を聞かれることも珍しくありません。街の治安はとても良く（東京よりも良いそうです）、物価や地価が高いのも事実です。アメリカの他エリアと同様、公共交通機関は不便なので（バス停にいてもバスが来なかったり、バスがそのまま通り過ぎてしまうこともあります）、大学から徒歩圏内に住む選択は正解でした。

気候について：

フェアファックスは日本の仙台と同じ気温だと言われており、日本同様四季があります。夏は湿度もそれなりに高く、冬は雪も降ります。緑が非常に多いエリアなので、紅葉の季節は家を一步出るだけでも景色がきれいで、毎日気分が高まっていたことを思い出します。

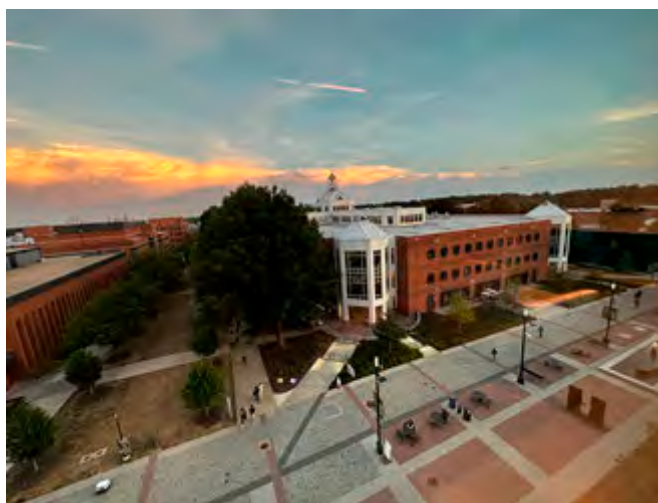
住まいについて：

大学キャンパスから徒歩 3 分のシェアハウスに、大学院生・PhD・そして同じプログラムでジョージメイソン大学に通っている留学生計 5 人と一緒に住んでいます。前述した通り、生活費が比較的高額なエリアなので学生のほとんどはシェアハウス又は寮に住んでいます。ハウスメイトについては、それぞれ生活スケジュールが異なるため一緒に遊びに行くことはあまりありませんが、キッチンなどの共用スペースでたわいもない会話を時々するような心地よい距離感です。求める清潔度合いに個人差が

ある点は共同生活の難しい点だと日々感じていますが、寛容になる心を身につけることができます。渡米してアメリカに到着した初日は、枕、ベッドカバー、食器、その日食べるものなど何もない状態でしたが、大学の Fulbright スーパーバイザーのご厚意で、その日の夕ご飯から、口座開設用のための銀行立ち寄り、必需品の買い出しまでを手伝っていただきました。本当に助けが必要な時に気持ちよく手を差し伸べてくださったご恩を忘れずに過ごしたいです。

食事について：

家にいる時は自炊をし、大学で食事をする際にはダイニングホールに行くか、自炊したご飯を持参して食べています。一番近いスーパーでも往復 1 時間近くはかかるので、基本的にはオンラインの宅配サービスを利用して食材を調達しています。友人と食事をする際にはバス 30 分ほどかけてダウンタウンに行くか、週末は 2 時間ほどかけてワシントン DC まで行くこともあります。



大学キャンパス

FLTA としての役目について

秋学期の TA としての主な仕事はクラス内でのアクティビティの補佐と採点でした。授業を丸々任されることもあり、非常に貴重な経験をできています。日本の大学に比べて、こちらの大学は授業の進行速度が格段に早いので、学生がどこでつまづいているのかをいち早く把握することが学生をサポートする際の肝になるように感じました。授業内容については、クラス内

でのアクティビティもかなり多く、実践的な言語利用を前提としたコースワークが整っている点が素晴らしいと思いました。私はたまたま秋学期の序盤から教壇に立つ事もあったことで、大学内の日本文化クラブには参加しづらい状況だったというのが正直なところですが（一部の学生が私を先生として見てしまい、彼らがクラブ活動を自由に楽しめない雰囲気を感じました）。そのため、クラブ外で何かできないかを考え、日本語のクラスを取っている学生や、日本語クラブに所属する人がオンラインでもフラットに交流する機会を創出するべく Discord サーバーを立ち上げました。私からも毎日何かしら日本に関連する楽しい内容を発信するようにしています。学生の日本文化や日本語への興味・関心の促進に少しずつ貢献したいと考えています。

秋学期の履修クラスについて

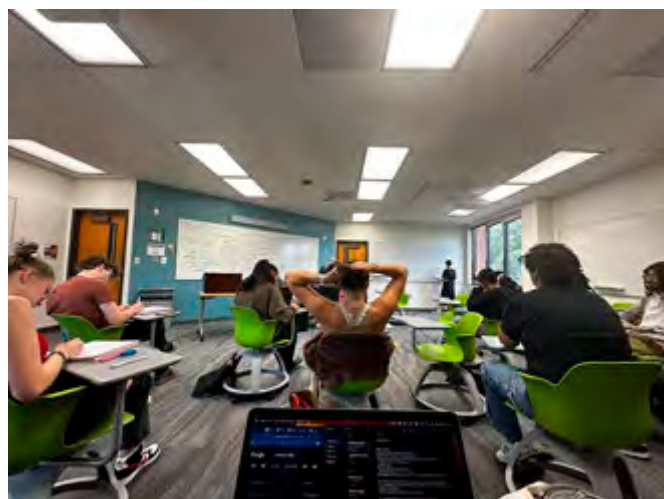
1. Media Theory

メディアとマスコミュニケーションにおける多種多様な理論と研究を網羅的に学ぶコースです。学期の後半は毎週グループ毎に振り分けられたトピックについてのプレゼンテーションを行い、生徒主導でクラス内でのディスカッションやアクティビティを遂行していく一風変わった授業形態でした。

授業メソッドについては TA 業務の参考にもなりまして、現地の大学生が日々どのようなメディアツールでどのような情報を得て、何を感じているのかについても学ぶことのできる貴重な機会でした。

2. Gender Representation in Popular Culture

教育、社会、政府、科学、宗教、法などのさまざまな領域にわたって、アメリカでのジェンダー表現方法についてメディア（映像・紙・音声など様々）を通して包括的に探求するコースです。週 2 回の授業のうち、1 曜日は教授のレクチャーを受け、残りの 1 曜日はクラス全体でのディスカッションを行います。当たり前ではありますが、異なる社会では異なる独自の社会規範が通用することを、ジェンダーと社会の結びつきの観点から理



授業風景

解する事で、より実感を伴いながら学び、分析することができたと思います。また、授業を取っていた多くの学生がこのトピックについてかなり精力的に勉強していたことから、教授と学生との間での会話のラリーが 1 時間途切れず続くこともあり、学びに対する意欲の強さにも感銘を受けました。

学外での過ごし方

平日は受講している授業を受けたり TA 業務を行うために、ほぼ毎日キャンパスにいました。時折、同じプログラムで同大学に來ている台湾、バーレーン、ロシアの友人や、同じ学部の同僚とご飯を食べたり、ハイキングに行ったりすることもありま



キャンプ



日本食作り（手巻き寿司）

した。大学内及び周辺エリアでは同世代の仲間と出会う機会が少ないので、ワシントン DC まで羽を伸ばすこともあります。冬休みの長期休みには中南米に旅行に行きました。クリスマスやお正月等のイベント時には現地の友人家族が家に招いてくれました。他にも、友人たちと日本食を食べに行ったり、手巻き寿司や餃子、シチューなどの家庭料理を作って振る舞うこともありました。手巻き寿司で使用したお刺身は、ワシントン DC で一念発起起業した日本人の方が長崎県から空輸している魚です。フェアファックスには日本人がほとんど住んでいないので、日本人以外の人と話すことがほとんどですが、ワシントン DC 付近では様々な形で頑張っている日本人の姿を見かけることもあります。フルブライト・プログラムのおかげで、学びと刺激の多い楽しい日々を過ごしています。



友人家族宅でのクリスマスディナー

最終レポート

日本に帰国してから約1ヶ月が経過しました。フルブライト・プログラムを終えて、感じたことを以下に書きます。

TA 活動について

春学期の TA としての主な業務は、週 2 回のスタディセッションを開催することでした。担当したクラスは、通常のクラスの倍速で進行する「集中クラス」だったため、授業に遅れを取らないように復習を行いたい学生が参加することが多かったです。



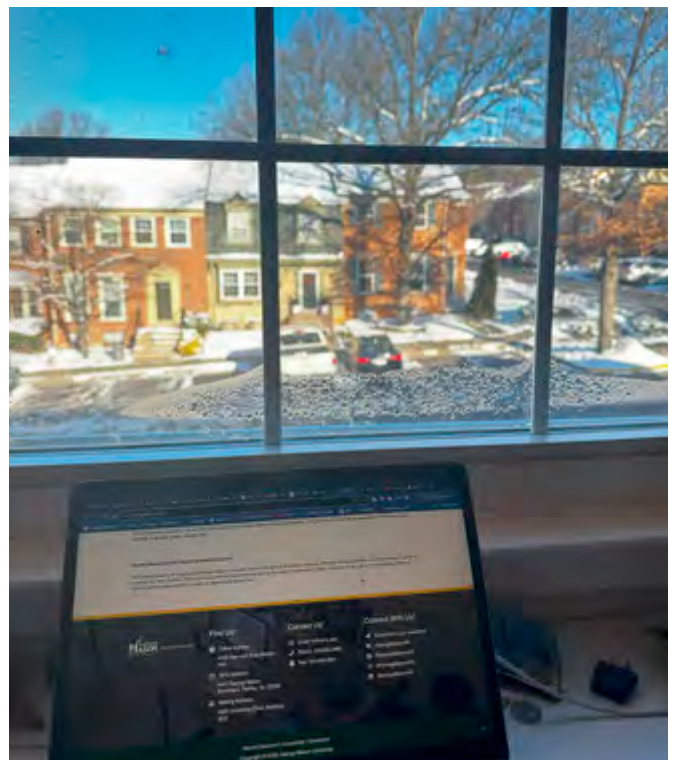
たこ焼きパーティー開催の様子

学習支援だけでなく、学習モチベーションを保てるような声のかけ方など、可能な限り丁寧なサポートを心がけました。また、前学期から引き続き、Discord サーバーを通じて日本の文化や言語についての情報発信や学生とのコミュニケーションを行い、クラス外での交流も深めることができました。さらに、大学内クラブ「Japanese Student Association」の活動について学生からの相談に乗る等、クラス内外で学生のサポートに寄与できたことに大きなやりがいを感じました。

春学期の履修クラスについて

1. Television Studies: Global TV

テレビ研究の主要な概念や、テレビを芸術形式として分析する方法を学ぶクラスです。授業では、世界中の現代ジャンルや批評的視点を取り上げ、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、



シェアハウスでの学習風景

階級、ナショナリズム、歴史、地政学的な対立など、番組コンテンツに影響を与える要素を探究しました。「日本のアニメ」や「韓国ドラマ」も取り上げられ、日本・アジア文化の存在感を改めて実感するとともに、自国の映像コンテンツ創造を客観的に捉えることの難しさを痛感しました。

2. Middle East Media and Screen Cultures

中東のメディア、映画、映像コンテンツ文化を学ぶクラスで、文化のおよび政治的文脈を考察し、重要な問題や批評的な議論に焦点を当てた形で学びました。このゼミは年度によって研究地域が異なるようなのですが、今期は主にアラブ地域の映画が研究対象でした。私の留学期間中は、パレスチナ問題が国際的な大きな話題となっており、キャンパス内やワシントン DC で頻繁にプロテストが行われていたので、アラブ諸国の映像制作に造詣が深い教授からこのタイミングで直接学ぶことができたことは、非常に貴重な経験でした。

学外活動・プライベートについて

長期休みには、アメリカ各地で働く日本人の方々と約 1 週間のロードトリップを楽しんだり、カナダや南アメリカにも足を伸



ウユニ塩湖にて友人と



ボリビアのラグーン

ばしたりと、旅行を堪能しました。各地の壮大な景色を堪能し、現地の人々との交流や、各国のローカルフード、各地のフュージョン和食を味わったことも良い思い出です。学期中は、友人たちとホームパーティを開催したり、ワシントン DC の美術館巡り、スポーツ観戦、テニスを楽しんだりしました。また、ワシントン DC ・フェアファックスエリアではスタートアップ支援が盛んであり、関連企業で働く方々との交流を通じ、現地の仕事観や事業拡大の動きを垣間見ることができたことも、非常に刺激的な経験となりました。

最後に

留学中は、限られた時間に対する焦燥感に駆られたり、学業とアカデミック外の活動とのバランスを取るのに苦労したりすることもありました。同時に、日本での社会人経験を経た後、新しい世界を 1 年間にわたって見聞きし、そして実際に生活をできたことは非常に幸運な機会でした。また、多様な人種が共存する地域での経験を通じて、様々な側面で各地の文化や信念が国境を越える重要性和その困難さを実感できたことは、今後の人生において大きな収穫であると強く感じていますので、この 1 年間で感じたこと、学んだことを今後活かせるように過ごしていきたいと思います。この貴重な経験をさせていただいたくにあたり、サポートしてくださった全ての方々に心から感謝申し上げます。



日暮れのキャンパス

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2023 年度 参加者レポート

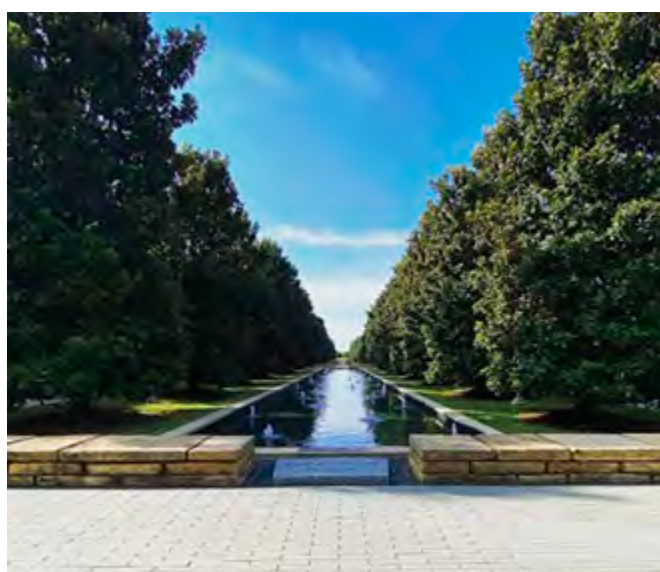
玉越夕貴 The University of Texas at Dallas, Richardson, TX

中間レポート

テキサス大学ダラス校に派遣されている玉越夕貴です。ここはコンピューターサイエンスで有名な、州立大学です。割合はアジア40%、白人20%、ヒスパニック18%等と、アジアの学生が多くいることが特徴です。2023年度は日本、韓国、ベトナムから1名ずつ、初めてFLTAが派遣されています。

応募～派遣まで

私は5年間、神奈川県公立高校で英語教員をしていました。4年目で担任として生徒を卒業させた後、自分の言葉で経験を伝えたい、教科書のみではなく、もっと生きた英語を教えたいという思いが消えませんでした。これまで一度も留学を経験したことがなく、大学時代も英語の専攻ではありませんでした。そのため6年目に必ず留学をするという決意のもと、5年目に教員として働きながら、FLTAに応募しました。その際、イギリスの大学院(1年間)にも同時に出願していました。両方の合格通知を4月に得た後、FLTAのMid-Year Conferenceへの魅力と、自分の母語である日本語を教えることで英語力を高めたいという理由から、FLTAを選択しました。1年間自己啓発休業の制度を利用しており、帰国後は公立高校に復帰して、FLTAでの経験を存分に発揮する予定です。



キャンパス内の噴水

自分の行っている授業について

秋学期はPrimary Teacherとして、週3回(1回50分)、日本語初級1の授業を2つ担当しました。1クラス19人、合計38人です。学生は勉強熱心です。この大学では第二言語の授業の選択は必修ではないのですが、アニメや漫画による日本への興味から学生は授業を受講しています。授業中、何度も手を挙げて質問をしたり、たった1か月でひらがな、カタカナを身につけていたりする様子から、学生のレベルの高さを感じました。また、初回の授業で、「引きこもり」や「中二病」の意味を質問され、日本語ですら説明がうまく浮かばず、答えられない悔しさもありました。

授業はもちろん、宿題、試験、小テスト作り、成績付けなど、全てを任されているため、責任が大きく大変ですがとてもやりがいがあります。日本語を教えた経験がなく、初めは学生のつまづくポイントが読めず苦労しました。特に濁点や「ヨット」などの音は日本語独特であり、習得に時間がかかっている様子でした。その際復習の機会を多く設けたり、例文にアニメや漫画などを取り入れたりし、なるべく学生が楽しめる授業になるよう、授業準備に多くの時間を割きました。また、4技能の中でスピーキング力の向上を一番の目標に、毎回試行錯誤しながら授業に臨みました。

また、授業前は数時間オフィスアワーの時間を設け、より日本語を学びたい学生やつまづいている学生のサポートをしました。1対1で話をすると、学生の考え方を学べたり、今まで抱きもしなかった日本語の質問に向きあえたりします。「もし～なら」と「もし～れば」の意味の違いなど、日本語の細か



日本の文化紹介の際、初級クラスの学生と

いニュアンスの違いについても意見を交わしました。このやり取りの時間がたまらなく楽しく、毎日学生と話していたくらいでした。

中間の授業では、文化紹介の時間を設けました。学生には事前に好きな日本語を選んでもらい、習字に挑戦してもらいました。それぞれ違う理由で日本語を選んでおり、「骨」という漢字の形が好きで選ぶ人から、「木漏れ日」など深い意味を選ぶ人まで様々で、日本語がいかに愛されているかを実感しました。また、日本語を教える中で、英語との違いや、日本語ならではの良さを日々感じるようになり、日本にいた時よりも日本が大好きになりました。

テキサスでの生活について

気候・買い物

テキサスのダラスは、湿気がなく、ほぼ毎日快晴です。夏は43度を超える暑さです。冬は0度以下の日が数日ありましたが、2月中旬には春（むしろ夏）のような気候で、冬の寒さが苦手な私には最高の環境でした。ただ、朝と昼、室内外で気温が激しく異なるため、服装選びにはとても苦労しました。

大学の近くに住んでおり、徒歩圏内にスーパーはありません。ただ、Walmart（スーパー）の会員になり、月額数ドルを払うと、自宅まで食材を配達してくれるため、この制度を利用しています。またダラスはアジア系のお店が多くあるため、タイやベトナム、韓国料理屋などへ、よく友達に車で連れて行ってもらっています。

シェアハウス

8月から10月は、何もかも初めてのことが多く、環境に慣れることにとても苦労しました。特に、シェアハウスは男女5人のベトナム人と住んでおり、キッチンの使い方など、文化の違いによる衝突が多くありました。日本にいた時は、例え仲の良い友達でも、言いたいことをためらうことも多くありました。ただ、このアメリカでは、自分の意見・考えを明確に伝えなければ、生きていけないことを学びました。

また、日々ベトナムのFLTAと会話をするとき、「ゆきはどちらのほうがいいの？」など、小さいことから、私の意見を聞いてくれます。その積み重ねから、自分のやりたいこと、したいこと、考えを伝えてもいいのだと気づかれ、自分の意見を言うことに慣れてきている感覚があります。恵まれた環境で、とても感謝しています。

大学外

【Meet Up】というアプリを活用し、日本語と英語のLanguage exchangeの会に定期的に参加しています。そこで、大学外の社会人と交流をしています。この会をきっかけに、インドのダンスパーティーに参加したり、多国籍の友達ができ

たりと、アメリカ以外の文化も経験できています。自分から行動を起こせば、様々な人と繋がれる、ダラスはそんな魅力的な町だと思います。

アメリカの文化について

アメリカでは日本以上に、行事を存分に楽しんでいる印象を受けます。Halloweenでは仮装した子供たちが近所の家を一軒一軒訪れ、お菓子をねだります。自分も仮装をし、訪れてきた子供との会話と楽しみました。11月はThanksgiving Day（感謝祭）があり、友達とFriendsgiving Dayを祝いま



アーカンソー州でのクリスマス



State Fair

した。食べ物は Potluck 形式で、手作りの料理を持ち寄り、友達への日頃の感謝を伝えます。友達のために時間をかけて料理をし、食事やゲームを楽しむこの行事が好きで、ぜひ日本にもあれば素敵だと思いました。12 月はアーカンソー州の友達の実家でクリスマスを祝いました。クリスマスプレゼントの個数の数や、家族同士での会話の多さに衝撃を受けました。Southern Hospitality という人に親切に接してくれる南部特有の文化を肌で感じ、本物の家族のように温かく迎えてくれる時間は、たまらなく幸せでした。

一方で、10 月には State fair という、各州で行われるお祭りに参加した際、私が参加する 1 週間前に、この会場で Shooting 事件が起きました。アメリカに住んでいるということを実感した機会でもありました。

Mid-Year Conference

FLTA program の中で最も楽しみにしていた Mid-Year Conference。世界約 50 か国から約 200 人の FLTA が集まる場です。自分の英語はどこまで通じるのかという好奇心や、各国の英語教育の現状等を知りたいという思いから、この 1 週間は 1 人でも多くの人と会話をしようと必死でした。Cultural festival では、今年度は日本のブースを開くことができませんでした。ただ、その日は私も浴衣を来て、各国のブースに立ち寄り、日本について伝えながら、各国の FLTA とやり取りを楽しみました。

最終日の自由時間では、クウェートの FLTA と 1 日過ごしました。美術館巡りを楽しみながら、パレスチナ問題や英語への思い、日本の課題などを語り合いました。彼女と比べ、政治に関する自分の無知さや、考えの甘さを痛感しました。また、彼女の英語力の高さにも圧倒され、少し落ち込んでしまいました。そんな時も、クウェートの FLTA は私のことを励まし、どんどん間違っ、学んでいけばいいんだよと励ましてくれました。彼女との会話は、これから先の人生で心の羅針盤になる



Mid-Year Conference でクウェートの FLTA と

ような、そんな宝物のような時間でした。

Mid-Year Conference 全体を通じて、英語は言葉のツールの 1 つであり、魔法のようなものであることを改めて実感しました。英語教師として帰国したら、自分も生徒も間違いを恐れず、とにかく英語を使うような指導がしたいです。残り約 2 か月、Seeing is believing のモットーのもと、自分の目で見、経験して、全力で日々を過ごします。

最終レポート

テキサス大学ダラス校に Primary Teacher として派遣された玉越夕貴です。日本に帰国して 3 か月が経ちました。日本の生活は何不自由ないことに気づき、現在は逆カルチャーショックに見舞われています。アメリカの店員さんはチップのために接客をしますが、日本の店員さんはいつでも 120% の接客をしてくれることに違和感があります。また、日本では決められた「正しい」ルールの上を進むことが美德とされますが、アメリカの人たちはそれぞれの目標のために自分で決めて道を進みます。アメリカでは生きていくためのハングリー精神が養われました。今後のフルブライト生のために、私がアメリカで経験したことをありのままの言葉で伝えますので、少しでも役に立てれば嬉しいです。

日本語授業

春学期からは、初級ⅠとⅡの 2 科目を教えました。時間が週 3 回 50 分から週 2 回 75 分になり、教材や時間の調整に苦労しました。特に初級Ⅰでは、学生の意欲や授業数の違いから、ひらがな・カタカナの定着率が低くなってしまい、試行錯誤しました。復習の時間により重点を置きつつ、中国からの留学生やアジアにルーツのある学生も多く参加していたため、韓国語や中国語など他の言語との違いにも、学生との対話で広げながら授業を行いました。最終的には漢字の成り立ちにも興味を持ち、日本により関心を持ってくれた学生が増えました。

初級Ⅱは前学期から持ち上がりの学生が殆どだったため、とてもアットホームで楽しい環境でした。げんきの教科書を用いながら、実用的な日本語の表現を伝えるよう工夫しました。例えばポケットモンスターの OP の歌詞の翻訳をさせたり、アニメのワンシーンを見せたりです。「自分の好きなもの」というテーマで日本語のプレゼンをした際は、学生の日本語の上達を本当に実感し、涙が出そうになりました。やはり、語学を教える上で、スピーキングに重きを置く指導が大事だと再確認しました。

また、自身がアメリカにいて気づいた日本語の大きなポイント「敬語」に対する考え方の変化も、その都度共有しました。アメリカで過ごして半年が過ぎた時、敬語を話す「窮屈さ」を感じました。これは英語にはない違いであり、日本人はいかに相手に配慮し、思いやる時間が多いかを気づかさ

れる機会となりました。

授業内では秋学期に続き、日本行事の紹介やコスプレをしました。行事ごとに節分やバレンタインなどのイベントを行い、文化の違いを学生も楽しんでいるようでした。



初級Ⅰ最終日、初級Ⅱ文化紹介の授業にて

国内・国外旅行

多少お金を割いてでも、今しかできない経験をできる限りしたいと思い、アメリカ国内では計12州に行きました。やはりアメリカは州ごとで法律や人々の雰囲気が全く異なるため、毎回刺激的な経験ができました。ミシシッピ州の Mississippi Valley State University にいる日本の FLTA の元を訪れ、実際に学生に授業をしたり、エジプトの FLTA の書道の授業に参加したりしました。その際には、Mid-Year Conference で会ったエジプト・ロシア・インドの FLTA との再会を果たし、とても嬉しく、話も弾み、お互いに励まし合いました。

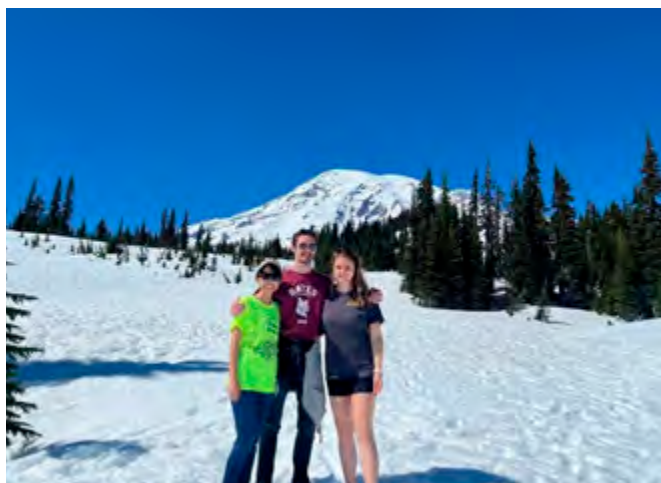
国外では春休みの期間を用いてメキシコに行きました。毎回お土産を買う際に値段を交渉する必要があること、トイレトペーパーを便器に流してはいけないため3回も詰まらせてしまったことを経験しました。またスペイン語圏で全く英語が通じなかったことにより地元の人と関わることができなかった、少し失礼なことをしてしまったという苦い思いもしました。や



ミシシッピ州での授業

はり言語と文化は密接に結びついているので、英語のみに満足するのではなく、簡単な現地の言葉を学習しておく方がより地元の人と交流が持てると学びました。

また、任期が終わり帰国前の5月には WhatsApp 内で Fulbright のグループに呼びかけ、ワシントン州のシアトルにオーストリアの FLTA と旅行に行きました。初めて会うメンバーとの1週間の旅行に最初はとても不安でしたが、2人共とても優しく、最高の思い出になりました。また、初めて海外で車の運転もできました。日本から国際免許を持って行って役立ったと思います。



オーストリアの FLTA との旅行 (Mount Rainier)

FLTA の経験による変化

食べ物、インフラ（電気・水道・道路など）や医療費の安さ・整備に関しては、日本はまるで天国のように感じます。アメリカで眼科を受診した際、一回の診療で3万円を請求されました。のちに保険によりカバーされましたし、アメリカの医療費の高さは聞いていましたが、実際に病院に行く経験をすると恐怖でした。

精神面では、アメリカにいたことで「自分は自分でいい」というマインドになりました。髪の色も、性格も、考え方も全て

個性であり、自分の好きなことをやる。そんな自分のことを支え、褒めてくれる。英語で話す自分の方が、「これをやりたい、食べたい」という自分の心の声に、素直に従え、友達との関係もとても居心地がよかったです。

学業の面に関しては、春学期の授業で受けた Linguistics (言語学) の授業が印象的でした。AAVE (アフリカ系アメリカ人の話す英語) の文法や発音の規則、アメリカ英語のみでなく、イギリス英語を話す学生からの発音の視点など、学生同士で議論しながらより良い教育を目指すスタイルが大好きでした。私も日本語の Counting words (一匹、一本、一頭など) に関する日本語独特の概念に対し、意見を求められました。この授業が自身に必要な知識・研究したい内容への気づきとなり、日本国内にはなりますが、修士号を取ることに決めました。

英語学習について

行きと帰りの飛行機で洋画を見ました。その理解度の違いが印象的です。行きでは、正直 4 割ほどの理解度だったものの、帰りに見た恋愛映画の内容は 9 割理解できました。もちろん映画のトピックによるのですが、この違いには衝撃を受けました。そして気づいたことは、映画で出てくる表現やスラングが、ことごとく今までアメリカの留学の日常で触れてきた表現ばかりだったことです。このことはつまり、Netflix などを用いれば、日本にいても自然な英語の表現を身につけることは可能なのだと、再確認できました。

アメリカでは、スピーキング力やリスニング力、よくネイティブが使う言い回し等の語彙力は格段に上がったと思います。一緒にテキサス大学に来た韓国の FLTA にも、「ユキの英語はかなり上達したね」と褒めてもらい嬉しかったです。アメリカ留学後、残りの休職期間を用いて、1 か月フィリピンの語学学校に行きました。そこで 1 日 10 時間の勉強を経て感じたことは、ライティング・リーディング力は、自身で実際に手を動かさないと、全く伸びないということです。また、日々新しい語彙を学び、エッセイを書いて添削・復習したりなどのインプットの継続で、特に英語力の伸びは実感しました。この違いを経験として肌で感じた今、これから日本で英語学習の旅をすることがとても楽しみです。

最後に

教員経験 5 年を経て、1 年の休職期間で FLTA の経験をしたことは、一生分の価値がありました。世界中の人と繋がることができたことはかけがえのない財産です。誰も知り合いがいない環境で一から開拓し、英語で困難にも乗り越えたことは自信にも繋がりました。また現地でできた友達には日本から持参したたこ焼き器を使ってたこ焼きパーティーをしたり、

ラーメンをふるまったりと、日本食のすばらしさも伝えました。自分の本音を話せ、全ての目標にいいねと後押しをしてくれる大切な親友が、私の帰国 2 日前に Surprise party をしてくれました。夜は女子 4 人で川の字になって寝たり、空港まで見送りに来て泣いてくれたり。今の考えや将来のことをあーでもないこーでもないと模索していることを伝えと一緒に悩んでくれました。英語の持つ力、魅力を、これからも高校教員として生徒に共有したいです。

日米教育委員会、IIE、現在の職場の皆様本当に感謝しています。これから英語教師として、FLTA の経験を存分に発揮し、これからの日本を変えていきたいです。



Surprise Party で友達との集合写真